

第83図 ブノフォドン象〔マンモス象とその仲間から〕
 Bunolophodon 岐阜県可児郡上之郷村番上洞で40年ほど前に上下の顎の骨が発見され、その化石は中新世の浅い海の堆積層であった

哺乳動物はどうでしょう

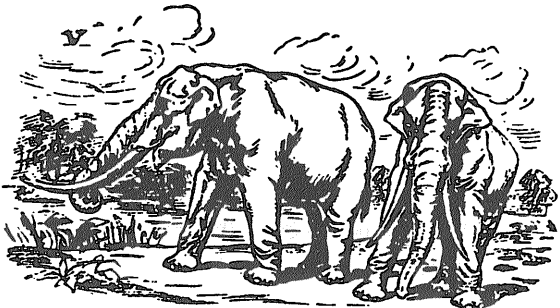
代表格として象をみましょう。ダイノテリウム(第82図)が第四紀にまでアフリカやユーラシア大陸にマストドン一族が中新世ではアフリカとユーラシア大陸だけでなく当時のベーリング陸橋を渡ってアメリカ大陸へと大発展をしています。日本で多いのはこの系列のブノフォドンでこの歯の化石は岐阜県や宮城県の中新世の地層から発見されています(第83図)。

短顎マストドン系のトリロフォドンも宮城県のこれは鮮新世の地層から発見されています。この鮮新世にはマストドンの血をうけたステゴドン(第84図)がどくに南アジア日本で活歩し第四紀まで繁栄しています。

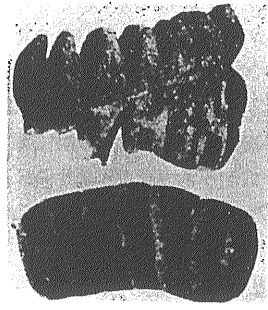
新第三紀の哺乳動物のもう1つの代表たる馬。これは古第三紀のエオヒッパスに由来する中新世の新型メリキップス。鮮新世のプリオヒッパスはマストドンとは逆にベーリング陸橋を渡ってアメリカからアジアへ。このように繁栄をたどる哺乳動物の他のものを挙げてみましょう。

なまけもの祖先たる大型のメガテリウム。ラクダの祖先キリンラクダ。ラマの祖先ポエプロテリウム。サイの祖先ゼセロリヌス。短角シカのムントヤクシカ。以上は草食ですがこれらを食料にした食肉性の犬の先祖犬グマ。狼に近いサーベル虎がみられました。

日本における世界的に珍しい哺乳動物は漸新世からこの中新世の中頃まで日本を含む北太平洋沿岸に棲息したデスマスチルス(第85・86図)です。彼と彼女たちは温暖な地域の遠浅の海岸地帯で水に浜辺にたわむれていた優しい草食性の動物だったのです。この化石からアーベルは有袋類だといひオズボーンは象シンプソンは海牛だといひはりました。しかし日本で発見された立派な化石についての日本の地質学者矢部鹿間高井井尻の4先生の共同研究によって海棲の奇蹄類ということが明らかにされ世界の論争に結着がつけられました。日本人の大きな業績として誇るべ



第84図 ステゴドン象 マンモス象とその仲間から〕
 Stegodon 背丈2~3m 上顎の長い牙がまっすぐのびるか少し上向きに曲っていたので現在の象に似ているが歯は大大違っている

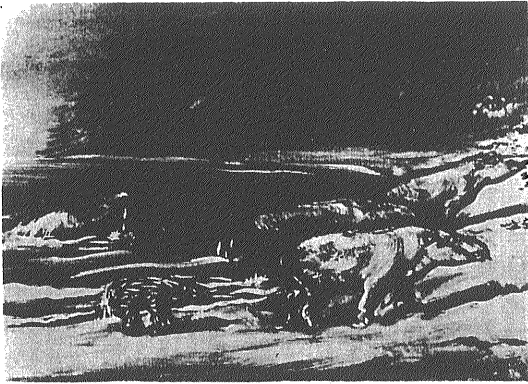


きてしょう。

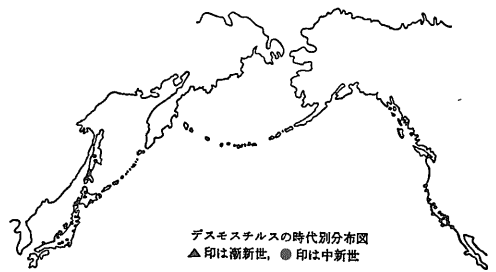
さてここに人類の登場です。まず人類と類人猿の両方の特徴を兼ね備えた類人猿ドリオピテクス。そして人類の化石オーストラルピテクス(第87図)。偉大なる人類輝やける未来のにない手自然を自らの幸せのために改造する力をもった人類の世紀の登場です。

ここから第四紀に入りました。新第三紀から第四紀に入るに当って絶滅した種は5%ぐらいにすぎませんから洪積世の生物界は現在とも変りない位といつてよいでしょう。しかし人類の出現という輝やかしいページこそどの時代とも比較できぬ位の画期的大事件。もし比較できるとすれば生命の誕生のページがあるくらいのことです。ですから以下は人類発展の駒をめぐってゆくことにします。

1924年のことです。南アフリカのキンバリー北方約100kmにあるタウングスの石灰鐘乳石の中からヤング(R. B. Young)が6才位の子供の顔面頭蓋と下顎の骨を発見しました。その脳の量は500~520ccと計算できそれは類人猿に近い(類人猿のこれと相当する脳量300~400cc現在の人間で6才では900~1000cc)わけですが歯ならびは人類的です。これは「南アフリカの類人猿」(Australopithecus africanus)と命名されましたが今から100万~60万年前に住んでいたと推定されている人類のはっきりした祖先といえます。その後南アフリカから次々と20体分の古人の遺骨が収集されま



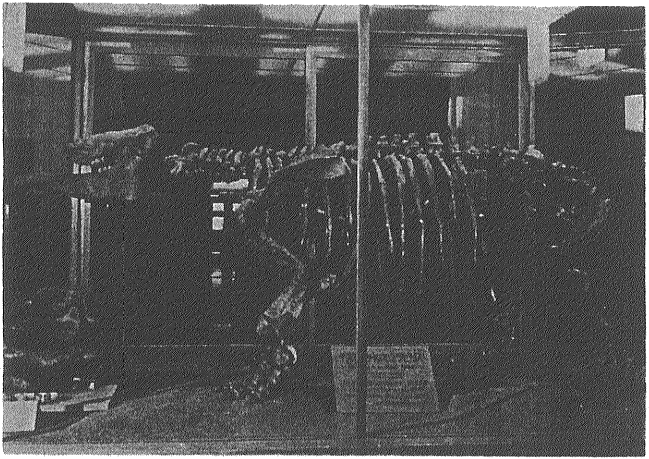
第85図 デスモステルス【図説：地球の歴史から】
Desmostylus Marsh 1902年に愛知県戸狩で中新層中から大きな頭骨と歯とが発見されて D. japonicus.Yoshiwara et Iwasaki と命名された。



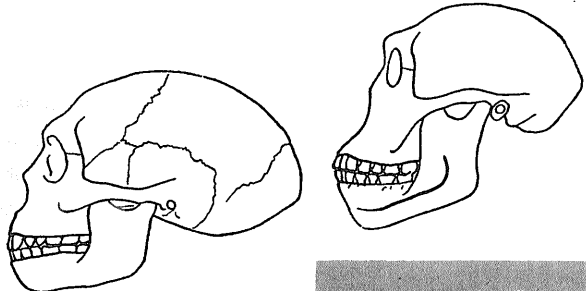
第86図 【図説：地球の歴史から】
▲印は漸新世、●印は中新世



第88図 直立猿人【図説：地球の歴史から】
Pithecanthropus erectus まだ猿的なところが少なくないが
シンデルーリス間氷期における生物界の新たなる威力であった



第87図 オーストラロピテクス人
【図説：地球の歴史から】 Australopithecus africanus これこそ人類と猿の間をつなぐ生物であり人類の立場からいうと 人類の祖でもある



第 89 図 北京 原 人【科学博物館所蔵】
Sinanthropus Pekinensis 火の使用を知っていたことは 五すばらしい人類の知恵のあらわれである 今でも少しずつ遺骨が発掘されている



したが いずれもオーストラロピテクス・アフリカスと似たりよつたりで オーストラロピテクス・トランスワーレンシスとかパラントロプス・ロブストスとかと命名された遺骨です。

考えてみますと 世界でもっとも遅れた人種差別の2つの国の1つ 南アフリカ連邦に輝やける人類の祖先の遺骨が見出されたとは 妙な因縁ですね。

この発見に先立って 1891年の夏 人類の祖先と思われる遺骨が発見されていました。ジャワのブンガワンソロで知られた ソロ河の近くのトリニールで オランダ人デュボワ医師が発見した1個の頭蓋骨と歯の事です。彼は これを「直立猿人」(Pithecanthropus erectus)と名づけましたが この脳量は935ccで(現代人の平均は1500cc)今から40万~20万年前(洪積世中期)の人類であることが その後の研究で明らかにされました(第88図)。

この直立猿人の特徴は 流線型の前頭部 強大な眉弓や強く突出した口吻 広い下顎枝などにありますが 歯は類人猿のもっているような犬歯をもちません。だからオーストラロピテクスよりもいっそう人間的に進んでいます。この直立猿人によく似た遺骨が 1929年に 同じアジアの北京の近くの周口店で 裴文中教授によって発見されました。現在までに40体以上も掘り出されているそうです(第89図)。これが40万年位前に生活していた北京原人(Sinanthropus Pekinensis)です。

1963年7月19日に 同じ中国の陝西省の藍田県というところで 新たに古人類の完整した下顎骨(第90図)が発見されました。「北京周報」日本語版第14号によりますと 厚さ30mの洪積世中期の紅色粘土層の下の方で 虎・象・豚・斑鹿の化石と一緒に埋もれていたそうです。また この化石のあったところから300mばかり離れた同じ地層の中から この人々が使っていたらしい石英のかたまりなどを発掘しています。北京原人よりも少し前の人類とのことですが 詳しいことは 今後研究されて 人民中国などに発表されることでしょう。

一方ヨーロッパでも 洪積世前期~中期の頃に活躍していた人類の遺骨がいくつか発見されています。有名なハイデルベルク人(第91図) スワンコム人 シュタインハイム人などがそれです。

以上の人々よりもまた少し進化発展したのが ネアンデルタール人(第92図)です。ドイツのネアンデル渓谷にあるフェルドオーファー洞窟の中から 1856年の夏に1つの頭蓋骨が発見されて いろいろと物議をかもしました。ある人は畸形だといひ また別の人は原始人

とって頑張りました。だから「原始人類」(Homo Primigenius)と命名した学者もいます。しかし マース河の支流の谷から続いて2体の遺骨が発見されてから ドイツ・フランス・イタリア・スペイン・パレスチナ・ロシアウズベック・アフリカなどから次々に約200体におよぶ遺骨が報告され ネアンデルタール人についての資料はとて豊かになりました。

それをまとめますと ネアンデルタール人は 男性160cm 女性154cmの平均身長をもち 強い眉弓と突出した後頭部 まるい顎を特徴とし 脳量は現代人よりも大きい位で しかも現代人より長い腕と短い足 その足も少し彎曲して 少し前かがみの姿勢をとったものようです。だから あまりスマートでなく イカしません。

これらの人々の舞台は洪積世中期から少し後期に入るようですが さて次に はっきりと洪積世後期になりますと いわゆる知的人類とよばれる私たちと同じ人類が生まれました。クロマニヨン人です。もう一度前に帰って クロマニヨン人出現以前の古人たちの生活をみてゆきましょう。

まずオーストラロピテクス人

彼らの骨とともに発見された道具らしいものは 河原の石を打ちくたいて作った ごく原始的な石器です。学者は 彼らがヒヒ・カモシカ・ノウサギ・カメ・トカゲなどを食っていたといひ すでに火を用いていたという学者もいます。それでは 直立猿人はどうだったでしょう。北京原人は?

直立猿人の生活は北京原人のそれほどには わかっていません。北京原人は 火を使った証拠やそまつな礫器 搔器そうきなど多くの石器を残しています。彼らは オオツノシカ・熊・ハイエナ・象・多毛犀などをうまく捕えて食べていました。ハイデルベルク人と同じくスワンコム人は 固いフリント製の石器を多く用い いわゆる握槌にぎりつづ(ハンドアックス)を使いこなしていました。遺骨に伴って発見された化石は 象・オオツノシカ・馬などですから 彼らはそのような動物を食べて生活していたわけです。この直立猿人・北京原人・ハイデルベルク人たちの生活した世界を 前期旧石器時代とよびます。

次の ネアンデルタール人の時代は 中期旧石器時代とよばれています。

前期旧石器時代の文化は アフリカ・南部ヨーロッパ・インドにおよぶ握槌文化(一部には核石器の文化もある) 北部ヨーロッパの剝片石器を主体とするクラクトン文化とよばれるもの アジア東南部の礫器文化(握槌を用いなくて 粗末な礫器の文化)の3文化圏にわけら